

『春秋左氏伝』比事属辞

中 村 俊 也

(序)

中国の現代は一九一九年に始まる。現代新儒家もここを出発点とし、中国現代文学もここをスタートラインとする。

魯迅(一八八一―一九三六)の『狂人日記』は同名のゴッリ(一八〇九―一八五二)の『狂人日記』と同様に、近、現代に生を享けた人々が、それまでの想像の域を超える困難にどう立ち向かうか、おのがじし覚醒してアクションを起こすように考えられて世に出た。「食人」という語が人の眼を把える。それまでの人々が殺戮闘争の最中に居らなかつたわけでは毛頭ない。人々は少数者の支配に委ねて、とりたてて抗うでもなく日々の生産に従事したわけである。但し、皆を取り巻く状況は苛烈となり、落ちていて生業に没頭し得ないことが多くなつた。

従来、閉ざされた社会の中で馴らされた人々が、新しい世の姿に目覚め、アクションを起こす。一九一九年、中国の固来の領有地であつた山東省が、ドイツの租借を離れて中国に返還されることが期待されたが、ベルサイユ条約のなかの取り決めとして、同省が大日本帝国の租借地になることが事前に知られ、北京大学の学生デモが外交官邸に押し寄せ焼き打ちされる事件が生じた。

国際的な生存競争、弱肉強食の結果としてスペンサー(一八二〇―一九〇三)流の社会進化論を簡単に承服できかねた学生は外交官の居

所を襲った。前年、魯迅の『狂人日記』が世に出た、その前年、ロシア革命があった。人々は耳目を大きく開いて自国の置かれている状況を直視しアクションを起こす必要があった。「食人」（人肉を食う）という表現は、『左氏伝・宣公十五年』の中に見える、春秋期楚國の包圍に遭った宋の城内で、「子を易へて食らう」（互いに子供を取り換えて食う、という惨劇）を踏まえている。

魯迅は卓越した古典学者であった。だからこそ、当時の状態を経書の事例と対比して人々の窮状が古昔に特定されたのみではなく、今日、それが中国の人々の前に途方もない大きさで拡大されているのを見た。狂人とは、このような現状を見るのに困惑し、それでも真剣に事柄に対峙し、退行しようとしないう人々に対する称謂なのである。

私達が、『春秋』をそれも『左氏伝』という注釈で読むとき、どのような方途をとって読むにせよ、私達の置かれた状況を無視して読むのなら、それは、リアリテイのない、果てしのない、晦渋な語の羅列となり人々を遂に永遠に経書から遠ざけてしまうだろう。かつて松枝茂夫氏の『左氏伝』の読みに接したとき、氏の置かれていた困難な境遇、その中でなされた『左氏伝』の読書ということに驚いたことがある。こういう現今の状況（二〇〇一、九、一一、イラク戦争、後）は古典のどこに密着し得るのか。こうした関心を有しつつ、『経』、『伝』の中の事に着目し、表現を味読する。日常を離れぬ読書の所作から経義は浮出することとなる。私達も魯迅はじめ先人のひそみにならない『左氏伝』の読みに着手することとなる。

ここには、宣公十五年の宋、楚二國の和議成立の立役者、宋の華元、楚の子反のアクションを論じ、二人それぞれのパーソナリテイに言及してみよう。

分量の多い『左氏伝』の伝文の取りかかりを、このように現代中国の文人に求めることとする。全く切り離されて箇所から古典に向かうことは危険である。たとえば、日頃中国語を話すことが何よりも大切なのであって、現代中国はかくて知られ、現代中国から近代、古代へと遡るのが、現今は至極当たり前のことである。ここを見失うと混迷する。

李沢厚（一九三〇〜）を例にとれば、彼の著作『中国現代思想史論』、『中国近代思想史論』、『中国古代思想史論』をまとめて読むことで中国のまとまった理解が得られるので、どれか一つに偏する読み方は全く意味をなさない。

しかし、『左氏伝』に入るについて全くの多岐亡半は困るので、当面見当をつけぬ訳にはゆかない。『春秋左氏伝』の関連書物は汗牛充棟

なので、どの本をまず読んでということも私は採らない。どの本でも手近にある分かり易いものから入るべきである。次序に拘って手を拱いているのが一番良くない。

華元のことについて見る場合にも、春秋の世（前七七二―前四八八）の年代、山東省南部一帯の地、魯国と関連有る諸国、というふうに見当をつけて入ってゆかねばならない。彼がどのような形相をもって表れ、評価がどうされるか。『春秋』とは人の褒貶に関わる書物なので、それは彼らの行跡に沿って、表現を注目しつつ読み進めれば、そこに『左氏伝』の有する立場が表れてくる。

I プロローグ 華元の人となり

『左氏伝』に最初に登場する国は、魯の他は、伝統国の宋、鄭である。二国はそれぞれ内紛を抱えている。そして、伝統を有するこれら二国の危急に際し、助力し、中原の国際社会に目立って出現し始めるのは晋である。晋の生じた大戦は『左伝』の過半の諸相である。強大国、楚はやがて晋と本格的戦争をし、この二大国の交戦は種々のエピソードを生じる。

宋、鄭とも、しかし、いつも晋や楚と連合して戦うとは限らず、単独で、たとえば宋が楚の軍勢を引き受けることもある。宋の華元は同国の将帥として大敵、楚に向かい合ったわけで、窮状を招いて、敵の将帥との直談判に及ぶのもこうした背景のなかで生じる。

華元についての『左氏伝』の言及箇所を連ね、この事件に分け入ろう。

「春、王の二月、壬子、宋の華元、帥を帥めて鄭の公子婦生と大棘に戦ふ。宋帥、敗績す。宋の華元を獲らふ。」〔宣公二年経文〕

「鄭の公子婦生、命を楚より受け、宋を伐つ。宋の華元、楽呂之を御ぐ。二月、壬子、大棘に戦ふ。宋帥、敗績す、華元を囚にし、

楽呂を獲て、甲車四百六十乘に及ぶ、俘とする二百五十人、讎こと百人。」〔宣公二年『左氏伝』〕

伝文はひとまず、宋の華元の敗北のことを示す。敗北にも、その形の有り得べきことを多くの戦記は示すが、『左氏伝』は物語的構成を以って読者の興味を繋いでゆく。敗北に伴う内応、内訌は有り得ることであるが、『左氏伝』は、君子の言として、相應の結果をこうした者たちに付し論評をなす。『左氏伝』の伝文は長いので、冗長にわたり読む人の倦怠を招かぬ用意として、適宜まとめて紹介するとしよう。

「狂狡、鄭人を略ふ。鄭人、井に入る。戟を倒まにして之を出だす。狂狡を獲。」

君子曰はく、礼を失し命に違ふ、宣なり、その禽と為ること。戎、果殺を昭らかにして、以つて之を聴く、之を礼と謂ふ。敵を殺すを果と為し、果を致すを殺と為す。之を易ふれば戮せらるなり。」「宣公二年『左氏伝』」

敵を迎えたのに敵を殺すことをせず、窮地に陥ったところに助力しようとし、返つて捕獲される。『左氏伝』のしめくりをなす「君子」の評価は、このような粗忽者は、戮の刑に当ると手敵しい。宋の人において、戦場で生じてしまった仇情は、どこかちぐはぐであるが、共通の行動のパターンとして、『左氏伝』はなおもそのような例を示す。

「將に戦はんとす。華元、羊を怒して、士に食はしむ。其の御羊斟与からず。曠昔の羊は、子、政を為せり、今日の羊は、我、政を致さん、と。与に鄭の師に入る。故に敗る。」

君子、謂ふ、羊斟は人に非ざるなり。其の私の憾みを以つて圍を敗り民を殄す。是に於いて刑、孰をか焉より大と為さん。『詩』の謂はゆる、人の良きこと無き者、とは、其れ、羊斟の謂ひか。民を残さなひ、以つて遑しとす。」「宣公二年『左氏伝』」

華元の与えた食事に対し、不服を唱える臣下が居て、前後左右、指示する方向と反対に向かつて行動する。こうして鄭の軍隊と戦うことになり、敗戦を招く。『左氏伝』の評価は、臣下である羊斟のちぐはぐな、遺恨を有しているゆえの不服従をなじる。総帥、華元の不公平には言及しない。

宋国は大いなる代償を払い、華元を取り戻そうとする。

「宋人、兵車百乘、文馬（〓彩色を施した馬）百駟（〓四百匹）を以つて華元を鄭より贖う。半ば入る。華元逃げ帰る。門外に立ち、告げて入る（〓城門に告げる手続きを踏んで入る）。」「宣公二年『左氏伝』」

車馬が先方に半ば収められるのを見届け、華元はその中途で脱出する。完全に車馬が届けられたとき、己が運命がどうなるか分からないので先手を打ったのである。城の中に敗戦の原因を生じた羊斟（〓叔胖）が先に到着していた。華元は難詰することなく、相手の依怙地なこじつけの論理、常套を引き出す。

「叔胖を見て曰はく、子の馬、然るなり、と（〓あなたの馬が敏速にここにあなたを運んできた、の意）。対へて曰はく、馬には非るなり、其れ人なり（〓馬がここに私を運んで来たのではなく、馬を御している人がここに、この通り無事自分を運んだ、の意）。既に合

へ、而うして来奔す（Ⅱ指揮官に報告するや、魯國に亡命してきた。）「宣公二年『左氏伝』」

臣下は臣下で、あくまで、華元と方向を異にするものの、相應に言動が一貫している。帰結としては他國への亡命となる。

宋で城の造修が始まる。華元の差配の下に工事は進行する。ここにも、工事に携わる者達が彼を擲擲する。華元はその者達を処罰せず、理由を言い渡し現場を立ち退かせる。

「宋、城く。華元、積と爲る、巡功す。」

城く者、謳ひて曰はく、其の目を睥だし、其の腹を晒にし、甲を棄てて復り。于思于思（Ⅱ鬢の多く生えているさま、ずいぶん頬ひげを伸ばして、まあ、の意）、甲を棄てて復へり来たる（戰場から逃げ帰ったのに、築城監督に任せられる、とは、まあ、の意）。其の驂乗をして之に謂はしめて曰はく、牛に則皮有り、犀の兕すら尚多し、甲を棄つるは則ち那ぞ（Ⅱ甲の皮の代用はいくらでもある、の意）。役人曰はく、従ひ其れ皮有るも、丹漆する若何ん（Ⅱ甲をいつそのこと赤く塗って、威武を整えられまい、だらしく引き返して来たものだ、の意）、と。華元曰はく、之を去れ。夫れ、其れ口は衆く、我は寡なし（Ⅱへらす口が多く、抗しきれない、の意）。」

「宣公二年『左氏伝』」

こちらをなじる役夫についてレスポンスする華元の懐の大きさ、役夫の饒舌に軍配が挙げられるわけだが、『左氏伝』は二人の応酬を子細に描出する。莫大な身の代を収めて取り戻された宋國の人材は、エマーゲンシイの中でその能力を発揮する。そうした人材の本場に関わるプロローグとして、本条は理解される。

Ⅱ 和平実現への行動

強國、楚の軍隊が宋に迫っていた。その矛先を阻む役割が將帥の華元に期せられた。しかし、尋常な方法はゆきづまる。華元はこともあろうに、敵將子反の寢所に迫り、彼と直接談判に及ぶ。宋人の期待を背負っている華元の口から、宋城内の困憊が報告された。敵將は一軍を預かる立場で華元の要請を入れた、むしろ華元を人質とする条件で。

「宋人、懼る。華元をして夜、楚帥に入らしむ。子反の牀に登り、之を起さしめて曰はく、寡君、元をして、病を以って告げしむ、

と。曰はく、敵邑、子を易へて食らひ、骸を析きて鬻ぐ、然りと雖も、城下の盟は、国を以つて斃るるも従ふこと能はざるなり。我を去ること三十里たれ、唯、命のみ是れ聴かん。子反、懼る、之を盟ふ而うして王に告ぐ。退くこと三十里、宋、楚と平らぐ、と。華元、質と為る。盟ひて曰はく、我、爾を詐はる無く、爾、我を虞るる無かれ、と。〔宣公十五年〕『左氏伝』

宋将、華元の必死の要請、凄惨な敵城内の状況を知り、子反は王の裁可を得ずに和平を実現してしまふ。『春秋』の戦争の中で、ここは「子を易えて食らう」として往々特筆されるが、先述の如く、現代の巨筆、魯迅がこの箇所を踏まえて、『狂人日記』の「食人」の事例としても何ら不思議はない。そして、魯迅が当時の人々に説く憂慮は彼我の将帥の応変の和平取り決めの決断を美わし、として評することではえられぬ。当代の、より一層凄惨にしてやむことのない彼我の闘争を座視している中国人、たとえば日露戦争でロシアに協力し処刑された同国人を嚙う人々に向けられた覚醒を促す表現である。二将帥の決断は歴史の中の単なる故事として埋もれさせではならず、大きなエマージェンシイの中で個人が覚醒のちにアクションを起こすべし、と魯迅は当時の中国人達に、否、今日の私達に、世界の人々に関与精神の大切さを訴えている。このような、レアリティを持ってゐるからこそ、『狂人日記』は、現代文学の古典として世界中で読者を魅きつけて停まないわけである。

Ⅲ 見え難い策略

『左氏伝』では、華元が宋国の重鎮であることを、宋の共公の葬儀後の政争に勝ち残った彼の行動を際立たせる叙述に依つて示している。ここも長文なので、いくつかに分けて説明を加えることとする。

「秋、八月、宋の共公を葬る。是に於いて、華元を右師と為し、魚石を左師と為し、蕩沢を司馬と為し、華喜を司徒と為し、公孫師を司城と為し、向為人を大司寇と為し、鱗朱を小司寇と為し、向帯を大宰と為し、魚府を小宰と為す。

蕩沢、公室を弱め、公子肥を殺す（Ⅱ宋国の行政の陣容が成つてから、突出する部分が見えてくる。政変の始まりである）。

華元曰はく、我、右師と為るは、君臣の訓えにして、師の司^{つかさど}どる所なり（自分の地位は先君からの約束により、王室の命令による）。今、公室卑められ、正すこと能はず。我が罪、大なり。官を治めること能はず。敢えて寵に頼らんや。乃ち晋に出奔せんとす。

二華（＝華元、華喜）は戴の族なり、司城は、莊の族なり、六官は皆桓の族なり（＝魚石、蕩沢、向為人、鱗朱、向帶、魚府は、皆桓公の出自）。」「成公十五年『左氏伝』」

華元が大国晋に亡命しようという背景を『左氏伝』は事実において淡々と示す。宋国の陣容の中で少数派の華元はどうい多数派の桓公系統の六族に抗し得ない、と客観情勢を示す。しかし、政治は人のアクションを俟って動く。華元は、密かに培った人脈に期待していたのかもしれないが、『左氏伝』はそこに言及しない。政治の一寸先は闇であつて、どこから誰が動くかは分からない。

「魚石、將に華元を止めんとす。魚府曰はく、右師（＝華元）反らば、必ず討たん、是れ、桓氏（＝蕩沢をはじめとする六族、魚石も魚府も、のこと）無きなり、と。」

魚石曰はく、右師、苟くも反るを獲れば、之に討つことを許すと雖も、必ずや敢てせざらん（＝華元に討伐をさせたとしても、桓公出自の六族の力が強大なのでたやすくは攻めきれない、の意）、且つ大功多し、國人、之に与る。反らざれば、桓氏（＝六族）の宋に祀ること無けん、を懼るるなり（＝華元が帰還しない場合の宋国の政治の危機の極みは、六族にしても國の安定なくして宋國の祭祀の継続は不可能との予測）。

右師討つにも、猶、戊（＝向戊）の在る有り。桓氏、亡ぶと雖も、必ずや偏せんや（＝根絶やしになることはない）。」「成公十五年『左氏伝』」

桓公出自の六族の中、一大抵抗勢力の中に、華元に強く期待する者が居た。外交、軍事に活躍をなした華元は、血族を越えて普遍的信頼を得ていたことが想像できる。こうした人材が、彼の亡命を止まらせ、宋国の政治革新に着手せしめる。事は電撃的に進行する。

「魚石、自ら華元を河の上りに止む。討つを請ふ、之を許す。乃ち反る。華喜、公孫師をして、國人を帥み、蕩氏を攻め、子山を殺さしむ。書して曰はく、宋、其の大夫、山を殺す、と。其の族に背くを言ふなり。」「成公十五年『左氏伝』」

六族の一人の魚石が華元を動かし、クーデタに踏み切らしめた。六族は不意を突かれ進退に窮する。彼等の会話の中に、華元の実像がえって鮮明となる。

「魚石、向為人、鱗朱、向華、魚府、出でて睚の上に舍す。華元、之を止まらしむ。可かず。冬、十月、華元、自から之を止む。可

かず。乃ち反る（『自からの勤めに依らない五氏の態度を見て華元は引き返す』）。

魚府曰はく、今従はずんば、入るを得ざらん。右師は視ること速くして言ふこと疾し。志を異にする有らん。我を納めざるがごとし、今、將に馳けん、と。登丘して之を望めば、則ち馳騁して之に従ふ。則ち睚の激を決り、門を閉じて登陣す。左師（『魚石』、二司寇（『向為人、鱗朱』）、二宰（『向帶、魚府』）、遂に楚に出奔す。

華元、向戌をして左師と為し、老佐をして司馬と為し、楽裔をして司寇と為さしめ、以つて国人を靖んぜしむ。」「成公十五年『左氏伝』

華元により宋国の大勢は固められた。結果から見れば、魚石は事を事前に予測し、蕩沢を除くことをさせ、かろうじて六族の一人をスケープゴートに供し、五人の生存を図った、と見られる。こうした事態が醸成されるのを華元がじつと観察していたとすれば、策士の面貌ここに極まれり、と言うべきか。『左氏伝』は結果重視である。結末において人の行動の可否が読者に見極められるのを待ち、時を措いての人々の評価を期待している。

IV 鬱屈の消散

華元の追撃をかわした一行の亡命先、強国楚の重鎮、指導力の中心である子反の人となりについて見てゆくこととする。大国が容易にその政治の底を窺わせないと同じく、そこを支える人材も容易に胸奥を余人に見せることをしない。私達は何を以つてこのような課題を解決できるのだろうか。

『左氏伝』は、結果主義を本旨とする。楚国の将帥、子反の姿は、全体として敗軍の將としてとどのつまり死を選ぶところに帰着せしむる。その要因として、彼の酒色に溺れる性格を特筆する。子反が宋の華元に寝所にまで踏み込まれ、和平の確約をさせられるところは、一方的に華元の和平攻勢にやむなく申し出を呑むという受動性を浮出させる。こうした受動性が、やがて鄢陵の大戦において失敗するというこの序奏として置かれている点が注目される。

楚は大国である。洋の東西を問わず、大国の浮沈興亡譚には必ず傾国の女性の登場がつきものである。楚国の将帥、子反の心を魅了する

のも夏姫という絶世の美女である。子反が將帥たるには、相当の条件が身に備わってなければならぬわけだが、夏姫は彼に甚大な悪しき結果をもたらす。夏姫の由来について『左氏伝』は、孔子の論評まで引いて彼女によって籠絡される政治家の失態を人々に印象づける。

「陳の靈公、孔寧、儀行父と夏姫に通ず。皆、其の相服（Ⅱ下着）を衷にして以つて朝（Ⅱ政庁）に戯むる。洩冶諫めて曰はく、公卿、淫を宣すは、民に效無し。且つ、聞こえ令からず、君、其れ、之を納めよ（Ⅱ夏姫の下着を隠すように、の意）、と。公、曰はく、吾、能く改めん、と。公、二子（孔寧と儀行父）に告ぐ。二子、請ふ、之を殺さん、と。公、禁めず。遂に洩冶を殺す。孔子曰はく、民の、辟多し、自から辟を立つ無し、とは、其れ、洩冶の謂ひか、と。」〔宣公九年「左氏伝」〕

杜預（二二二～二八四）は、『春秋』の本文「陳、其の大夫、洩冶を殺す」に「洩冶、淫亂の朝に直諫して以つて死を取る。故に『春秋』の貴ぶ所を為さずして名を書す。」と注する。

洩冶の直情徑行は、無暴の行いとして指彈されている。ここにも、その結果を浮出させる説明が際立つ。

この件は、宋、楚の和平（宣公十五年）の前のことである。それから大分経つてから子反は夏姫に氣をそられる。この間に夏姫がかなり傾城の美女振りを發揮したのであるうことは想像に難くない。

「楚の陳の夏氏を討つや、莊王、夏姫を納めんと欲す。申公巫臣曰はく、可からず。

君、諸侯を召すは、以つて罪を討てばなり。今、夏姫を納むるは、其の色を貪るなり。色を貪るを淫と為す、淫は大罰と為す。『周書』に曰はく、『徳を明かにし罰を慎む。』とは、文王の、周を浩せる所以なり。徳を明かにす、とは、之を崇むるを務むるの謂ひなり。

諸侯を興し以つて大罰を取るが若きは、之を慎むには非ざるなり。君、其れ、之を圖れ、と。王、乃ち止む。』〔成公二年「左氏伝」〕

諫臣の進言に王が夏姫を迎え入れることは停められた。しかし、將帥の子反はいたく夏姫に執心してしまふ。諫臣は、彼に対しても夏姫にまつわる負荷を説いて迎え入れに固く反対する、ここは子反も勧めに従うこととなる。

「子反、之を取らんと欲す。巫臣曰はく、是れ、不祥の人なり。子蛮（Ⅱ鄭の靈公を弑させ、御叔（Ⅱ夏姫の夫）を殺し、靈公（Ⅱ陳の靈公）を殺し、夏南（Ⅱ夏姫の子の徴舒）を戮し、孔儀（Ⅱ孔寧と儀行父）を出だし、陳國を喪ぼす（Ⅱ楚が陳を滅ぼした）、何ぞ不祥の是くの如しぞ。人の生くること、実に難し。其れ死を獲ざること有らんか。天下に美わしき婦人多し。何ぞ必ずしも是ならん、

と。子反、乃ち止まる。」「成公二年『左氏伝』

諫臣が真正正銘にその役割を完うするはずのないことを『左氏伝』は執拗に後日談を補完し説き進める。天下に永遠の正義は存せず、時所によってそれらの徳が支えられている、と言う如く。かくして、『左氏伝』が多くの戦乱の中に生じた文学であることを私達に教える。申公巫臣が、王や子反に美姫を娶ることのないよう進言し、その挙句自から美姫を手に入れてしまう。子反の収まらぬ鬱屈がどのように春秋期の政情に波及するか、『左氏伝』は事件の進捗に目を向けることを中心にし、子反のフラストレーション如何を針小棒大に説くことはない。事は宣公十四年の楚が宋の包圍を解いたところに始まる。子重が申公の田を貰い受けたき旨、王に申し出ていた、申公巫臣がこの田邑が無いと兵賦、軍賦のもといなるゆえ、これは、直轄の領地として残し置くべきだ、と王に進言する。王は言を納れる、子重は巫臣を恨んだ。『左氏伝』は政治の生動の中に簡単な折り合いのつかぬことを淡々たる筆致の下に示す。政争の開始である。

「子重、是を以って巫臣を怨む。子反、美姫を取らんと欲す。巫臣、之を止む。遂に取りて以って行く（＝巫臣自から美姫を手に入れ晋に行ったことを指す）。子反、亦た之を怨む。共王（＝楚の共王）の位に即くに及び、子重、子反、巫臣の族、子闾、子蕩及び清尹弗忌及び襄老の子、黒要を殺して、其の室を分かつ。子重は子闾の室を取り、沈尹と王子罷をして子蕩の室を分かたしむ。子反、黒要と清尹の室を取る。」「成公七年『左氏伝』

論功行賞に関わる怨恨は簡単には解けず根深い。『左氏伝』は、執心する絶世の美女を横取りされた遺恨がなかなか解消しないことを、新王即位に伴う政変で巫臣に関わる勢力を一気に葬り去る、子重、子反の政局リードという中で描いてみせる。しかし、政局の機微を読み切ってゆく申公巫臣の反発、リアクションは尋常ではなかった。新興の強国、呉に肩入れして楚の勢力を殺いでゆく布石を彼は打ち、子重、子反を追い詰める。

「巫臣、晋自り、一子（＝子重、子反）に書（かみ）を遺（のこ）して曰はく、爾（なんぢ）、讒（ざん）慝（てい）貪（あま）憚（れん）を以って君に事へ、而うして多く不事（ふじ）を殺す。余、必ず爾をして奔命（ほんめい）に罷（たふ）れ以って死せしめん、と。

巫臣、呉に使ひせんことを請ふ。晋侯、之を許す。呉子壽夢（じゆぼう）、之を説（と）ぶ。乃ち、呉を晋に通ぜしむ。両の一卒（＝一卒は二十五人、卒は百人。二十五人ずつ四組み、百人で、『司馬法』に依る編軍の法）を以って呉に適（あ）かしめ、偏両の一を（偏は戦車十五乘、一両は

二十五人)を舎かしむ。

其の射御とともに、呉に乗車を教え、之に戦陣を教え、これに楚に叛くを教えしは、實は其の子の狐庸なり。呉に行人(日間諜)をらしむ。

呉、始めて楚を伐ち、巢を伐ち、徐を伐つ(Ⅱ巢、徐は楚の属国)。子重奔命す。馬陵の会に、呉、州来に入る。子重、鄭自り奔命す。子重、子反、是に於いてか、一歳のうち七たび奔命す。蛮夷の楚に属する者、呉、尽く之を取る。是を以つて、始めて大なり。呉を上國(Ⅱ諸夏)に通ぜしむ。」「成公七年」左氏伝」

単なる怨恨ではなく、申公巫臣対子重・子反の対立図式が、新たに新興国呉を呼び込み繰り展げられることになる。『左氏伝』は、この間に翻弄される子重、子反の狼狽振りを、他國に居ながら時局を差配する申公巫臣の老練さを対比的に際立たせる。思えば、『左氏伝』は、息の長い読書の果てに見える深奥の有ることを示唆していよう。

しかしながら、子反は長く楚國の政治に関与する将帥であり、重臣である。従つて大國からの賓客を迎え入れる大役が彼の肩に懸る。賓客と接待役の間に見える応酬は、余裕あるように見えて緊迫のせめぎ合いであることは古今に何らの差異の有ろうはずもない。晋の郤至は賓客として楚國に在つた。客をもてなす任務を行う子反は、言動に行き届かぬところが出る。晋、楚の間の懸隔が広がることとなる。二人のやりとりの中に当初から行き違いが有つた。金縛りになつたように拒たりが出来て修復不能のもといとなる。

「郤至、楚に如き聘せられ、且つ盟に洩む。楚子、之を享す。子反、相け、地室(地下室)を為りて懸くる(Ⅱ鐘鼓を懸ける)あり。郤至、將に登らんとす(Ⅱ堂上に上る)るに、金奏、下に作る(Ⅱ下で鐘、鼓が奏せられる)。驚きて走り出づ。子反曰はく、日、云に莫る、寡君、須てり。吾子(Ⅱあなた)其れ入られよ、と。賓(Ⅱ郤至)曰はく、君、先君の好みを忘れず、施きて下臣(Ⅱ賓、すなわち郤至)に及ぶ、之に賑ふに大礼を以つてし、これを重んずるに重ぬるに楽を備へたり。如し、天の福ありて、両君、相見えれば、何を以つて此に代えん。下臣、敢えてせず(Ⅱ現に奉行されているのは両君の相見の礼で、郤至が進んでお受け出来ない、の意)。子反曰はく、如し、天の福有りて、両君相見えれば、亦た唯だ是の一矢もて相加え遺すこと無けん、焉んぞ樂を用ゐん、と(Ⅱ万が一両君が戦いの場で会えば、一矢も使い残すことは無いし、音楽を奏することもありません、の意)。寡君、須てり、吾子、其れ入ら

れよ、と。竇曰はく、若し、之を讓むるに一矢を以つてすれば、禍いの大なること、其れ何の福いをか為さん、世の治まるや、諸侯、天子の事を間にして、則ち相朝するなり。是に於いてか、享宴の礼有り、享なしに以つて共儉を調ふ。共儉以て礼を行なひ、而うして慈惠以て政(まつりごと)を布き、政以て礼成る。民、是を以て息ふ、百官、事を承け、朝して夕べにせず。此れ、公侯の、其の民を扞城(二防ぐ)する所以なり。故に曰はく、越々たる武夫は、公侯の干城、と。其の乱に及ぶや、諸侯、貪ほり冒し、侵欲忌まず、尋常を争い、以つて其の民を尽くす、その武夫を略き、以つて己が腹心、股肱、爪牙と為す。故に『詩』に曰はく、越々たる武夫は、公侯の腹心、と。天下に道有れば、則ち公侯能く民の干城と為りて、其の腹心を制す、乱には則ち之に反す。今、吾子(二ここは子反を指す)の言は、乱の道なり、法と為す可からず。然るに、吾子は主(二主人、もてなし役)、至(郤至)敢えて従はざらんやと、と。遂に入りて事を卒ふ。

歸りて以つて范文子(二晋の重臣)に語く。文子曰はく、礼無くんば、必ず言を食む(二言葉がまとまりをなさぬこと)。吾死するに日無きのみ(二晋楚は間もなく争う、の意)。「成公十二年『左氏伝』」

臣下同士の会見の場で相手の慇懃な態度に誘発されて、公侯の大礼で迎えている威容を背景に、両君戦場で遭遇したら一矢も余す事無く打ち合うぞ、という、なかば冗談のうちに放った言葉が、極度の緊張に在る賓客を刺激してしまう。『左氏伝』は、入念に子反の疏忽を写して『詩』の引用にも及ぶ。

大国の将帥ともなれば、実質上功罪半ばし有能を謳われる者でも、とかく失点が目立ってしまう。大きな領域における振幅の有る動きとは、このような足跡を結果として遺すものであることを『左氏伝』は示している。最後まで子反の失点を論らうには、晋國の失態を彼一人に帰している観も有る。『左氏伝』は特定の人物が成した言動に対し、「免れざらんか(二仕事を完うし、生を完うできない、失敗するはず、と念を押すように予言する)と評する。子反の草率な言動に呈されている点、注目される。しかし、人は事に当たり、結果から物事を覗くように恬淡として手控えられるのであろうか。むしろ、大国を与かる将帥がこうした局面でかく評されることには、読者としてある種の反発を感じるのである。

「楚、將に師を北にせんとす(二鄭、衛を侵すこと)。子蕘曰はく、新たに晋と盟ふも、之に背く、乃ち可ならざらんや、と。子反曰

はく、敵、利あれば、則ち進む。何の盟か之有らん。申叔、時に老るいたり、中に在り。之を聞きて曰はく、子反、必ず免れざらん。信以て礼を守り、礼以て身を庇ふ、信、礼の亡びるには、免れんと欲するも得んや。」「成公十五年『左氏伝』」

魯の成公十六年、六月、楚軍は鄆陵（Ⅱ現在の河南省鄆陵）において晋軍と大会戦を開始する。早朝から暮れ方まで勝敗がつかず、双方とも疲労で堪え難かった。そこで休戦となる。このような場合、微妙な指揮の差が結局決着をつけることとなる。戦場の疲労を速く除くには飲酒が採られる。しかし、過度の飲酒は疲労回復どころか全軍を弛緩させ、士気を萎えさせるし、敵方に虚を突かれる原因となる。楚軍の将帥、子反はこの度合いを失し、楚軍は崩れ、失態は今まで一緒に戦った勇猛の将帥子重から難詰された。王が使者を發し、彼の自決を押し止めようとしたが、子反は死を選ぶ。『左氏伝』は、戦局の進展を克明に記してゆく。

「且にして戦いひ、星を見るも未だ已まず。子反、軍使に命じ夷傷を察せしめ、卒乗を補なひ、甲兵を繕ひ、車馬を展ね、雞鳴にして食らはしめ、唯だ命をのみ聴かず。」

晋人、之を患ふ。苗賁皇、徇がひて曰はく、乘を蒐め卒を補なひ、馬に秣かわせ兵（Ⅱ武器）を利くし、陳を修め列を固くし、靡食にも申ねて持る。明日、復た戦わん、と。乃ち楚の囚を逸す。

王、之を聞き、子反を召して謀る。穀陽豎、飲を子反に献ず。子反、酔ひて見ゆ能はず。王曰はく、天、楚を敗られしかな。余、待つ可からず、と。乃ち宵に通ぐ。

晋、楚軍に入るに、三日の穀あり。范文子、戎馬の前に立ちて曰はく、君は幼く、諸臣は不佞、何を以て此に及ぶ。君、其れ、之を戒め、と。『周書』に曰はく、惟だ命のみ常に于いてせず、徳有るの謂ひ、なり（Ⅱ運命は恒常的にある国、人に味方するのでなく、それらの徳如何によつて結果が齎される、の意。）」成公十六年『左氏伝』」

飲酒した将帥を眼の当たりにした楚王の困惑、焦慮は限界に達する。醒めるのを待つて子反と軍議を展開すれば間に合つたかもしれない。しかし、年若い王は待てず、そのような王の若さを計算できずに眠りこけてしまった将帥は配慮において行き届かない、と評されても致し方ない面がある。晋は王の軍隊が残し置いた糧食にありついて疲労を癒すことができた。戦場の一進一退は、平和な時の想像を遙かに超えている。子反が飲酒したのもその目的は素早い戦場での疲労回復に在つたのかもしれないし、歴戦の勇将はこうした行為により、度重なる

激戦を凌いだのかもしれない。しかし、挽回し難い敗績を招いてしまった。待避後、子反に対する論評が生じる。共に戦い抜いた同僚の叱責は重く彼の心に突き刺さる。王の慰めは敗績を造り出した本人のものであれば、一国の中心であれ、戦場における全体的責務の分担者なのであり、子反を庇う力とはなり得ない。

「楚帥、遷る。瑕（〓楚の地）に及ぶ。王、子反に謂はしめて曰はく、先大夫（〓楚の將帥、子玉、城濮の敗績を召く）の師徒（〓軍勢）を覆えせるとき、君（〓現在の王）は在らず（〓軍中には居ない）、子、以つて、過つと為す無かれ。不殺の罰なり。子反、再拜し稽首して曰はく、君、臣に死を賜はる、死するすら且つ朽ちず（〓君が私に死を賜つたとして、死んでも私の汚名は消えるものではありません）。臣の卒（〓子反の軍勢）、実に奔（〓事実遁走したこと）るは、臣の罪なり、と。子重、子反に謂はしめて曰はく、初めに師徒を隕てし者、而、亦之を聞きしならん（〓城濮の戦いで將帥子玉は責めを負つて自殺したことを子反に確認するように聞く。この時点で、子重、子反は敵対関係になっている）。盍ぞ図らざる。対へて曰はく、先大夫（〓子玉）に之有る微しと雖も、大夫（〓子重のこと）側（〓子反のこと）に命ぜん。側、敢えて不義ならんや。側、君の帥を亡なへり。敢えて其の死を忘れんや。王、之を止めしむ。及ばずして（〓王の制止の命が届かぬうちに）卒す。」〔成公十六年『左氏伝』〕

王の制止は子反には予測し得たろう。しかし、歴戦の同僚の職責の何たるかを知つて、当然の叱責は決定的に彼を自決に追いやる。將帥の戦場における失敗の責任の取り方として、死を選ぶケースは、『春秋』においてさほど多くない。ここは特筆すべき条である。

V 華元と子反（パーソナリティ）

華元は、中原の伝統国の出身である。その性格は、所定のコースを外れることなく、目的に向かつて突き進む果斷さに特色を有する。自己に向けられる風説、論評を全く気にしないわけではなく、誠実に弁明するところもあるが、方向転換をし將帥としての行動のうえで論理のつじつまを合わせてゆく、臨機応変を兼ね備えている。宋国の新王即位に伴う政変の見極めは読者を驚嘆させる。読者は官職の羅列に幻惑されて華元に対する包圍網が形成されたと思う。しかし、政争、戦闘に多く身を置いた経験の有する彼に、宗族、血縁にとらわれぬ人的結束が生じていたことは、クーデタが成つてからの新政権の陣容が物語る。長い伝統を踏まえ、新時代を切り拓ける有能が彼に備わつてい

たことが判明する。『左氏伝』の中において、惨状を前にしての和平実現に決死のアクションを起こし、先方と、将帥同士の独断へと突き進むのは、かくの如き人材でこそ、の感慨を私達に深くさせる。

子反は新興の大国、楚の出身である。大国楚は中原に根を張る強国、晋と数度の大会戦を繰り広げる。子反を襲う恒常的なストレス、これは平和時に育った私達の想像外である。絶世の美女に心を奪われる必然性を限定的モラルの中で論じるにはとうてい処理し切れぬものがある。楚王、子反が誘惑されるのを止めた申公巫臣は、楚国に根づいている巫術の師の系統の人物で、並外れて予知能力に長じている。彼は、子重、子反との政争に敗れ、晋国から遠隔操作でやがて楚を弱める新興の超大国、呉を育成する。しかし、当面、二子の存する間、晋に表立った抵抗はできない。子反の性格は直情径行、大国を支えるのにこのような柱石を欠いては、その国の展開もないことは一々挙例することも必要ない。

『左氏伝』とは、現代の私達に先例を次々と想起させ、目下の当面するケースに関わる要素群に省察をなさしめ、未来を知るよう要請するナヴィゲーターなのである。子反を最終的に追い詰める子重の舌鋒は、決して派手ではないが、先例を挙げて決して譲歩しない。彼は『左氏伝』により少ない表現で子反の知己であることを読者に印象づける。

子反は総じて小回りの利かぬ鈍重な人物である。戦場ではこのような存在が旗印となるのであり、敵の大軍を前に右往左往する兵卒をしつかりと把えて離さないのも、このような屈強な存在有つてのことである。

傾国の美女に手が届かず、巫術に惑わされぬ理性を備えていた大器。しかし、『左氏伝』は、美談が歴史の中では束の間の偶然を評価する表現であることを知っている。大人物の前に待ち受ける危機、それは、現代人もハツとするようなふとした空隙から生じる。ノンコーションとリラックス、これは大業に引きもきらず取り組む存在が遭遇する時空のブラックホールなのかもしれない。『左氏伝』が随所に言わせている、「免れ^{まぬ}ざらんか。」が重く胸を打つ。

結語に代えて

現代中国の文人、郭沫若（一八九二―一九七八）の『青銅時代』の訳業に、私はかつて八ヶ年を費やした。

当初は學術論文風の独特の行文に慣れなかったものの、やがて、中国語のリズムに乗って一応の草稿が出来上がった。大作に向かつては、今更ながら考えるのには、後先ことは考慮出来なかつた。訳業を後押ししてくれたのは多くの人の激励も有つた。しかし、何と言つても人を惹きつけてやまない風格のある文体の中に展開する古代中国世界。それは、古代を古代としてのみ感じさせないリアリティに満ちてゐた。甲骨、金文の実績を有し、現代政治にコミットした巨筆を私は眼の当たりに出来なかつた。それが実現し得ないというのではなく、そのような用意が私の中に備わつていなかった。例えば、「呉起について」（『述呉起』）は、呉起の人となり興味深く紹介すると同時に、彼が『左氏伝』の作者である、という論及も有つて、相当に意義深い作品と見た。未だ、私として、呉起が果たして『左氏伝』の作者か如何確信は有していない。しかし、戦争の渦中に終始身を置いた人の見識が『左氏伝』の中には存し、平和時に育つた私達には窺い知れぬ洞察が含まれていることが認められる。中国現代の文人達が身を置いた一九一〇年代から一九四〇年代は、春秋の世をはるかに超えた酷烈の状況が人々を取り巻いていたことは言うまでもない。

茅盾（一八九六―一九八二）はその自伝に、母親から折檻を受けたとき、「小杖は之を受け、大杖は之を避く」という、『春秋』に関わる名言を想起し、巴金（一九〇四―）は、『激流三部作』の『春』、『秋』に登場するインテリ主人公、覺新（ジュエシイン）をいつも追ひ込む当権派の叔父の手につねに『春秋左氏伝』を持たしめている。私達は、『家』、『春』、『秋』と並べて大家族の倒壊のドラマに一応の納得をする。しかし、日本であまり論ぜられることのない『火』を、『春』、『秋』、『火』と三つ列べるとき、私ならずとも、清朝公羊学の先蹤、劉逢禄（一七七六―一八二九）の『春秋』は火なり、天子も諸侯も蒸たぎの属にして火の強さに与かる無きなり。（『春秋公羊経何氏釈例』）を想起するかもしれない。『火』は日中戦争を背景にボランティアの女子中学生を主人公とした小説である。戦争は全く過去のことではなく、現代のことでもある。巴金が日本人に知れずに措いた表現を『左氏伝』の小文をまとめるに際し、私は改めて考え直す。日本では、中国現代文学と古代哲学は全く分かれてゐる。郭沫若のみならず中国の人は決して切り離してゐない。たとえば、『左氏伝』のリアリティは、戦争というゲームではない背景を有しているから……。だから、私はたとへば『左氏伝』を読むとき、目下読んでいる巴金を考え、巴金が尊敬した（『火』の中にそれを確認する表現が有る）魯迅を同時に読みすすめたい、と欲している。

(1) 『狂人日記』(『魯迅全集』第一卷)(一九八一年北京人民出版社)本文中(四二六頁)に一番上の兄が私に本を読んで聞かせる時に、自から「子供を取り易えて食らう(『原文』「易子而食」)ことがあるんだ。」という文があり、ここに關わる注の文(四三三頁)に「このことは『左伝』宣公十五年に見える、宋の將軍華元が楚の將軍子反に対して宋國の都城では楚軍に包圍され困憊している慘狀「こちらの城邑では子を易へて食らひ、骸を折きて饜す。」と述べるところがそれである。」と説明している。こうした注文は別行の『魯迅全集』中には必ずと言っていいほど記されている。

また、『宣公十五年』『公羊伝』には、楚の莊王が、子反に宋の探査に行かせたところ、子反はそこで華元から宋の子供を取り替えて食べ、骨を薪たきぎとしている、という窮状を聞き、王の許可を得ないで和平の決定をしたことについて、述べる。『左氏伝』のこの条に直接こうした言及はないが、華元の必死の訴えに子反の確証有る楚の決定が有った、と考えられる。成公十六年の子反の戦場での「失態」を庇う王の弁護には、子反への信任が窺われるので、楚王の相当の信任を子反が受けていたことが判る。従って『左氏伝』は、王の承諾如何については取り立てて説明を控えている、と考ええる。

(2) 紀元前六三二年(魯の僖公二十八年) 晋、楚が城濮の地で戦い、楚軍が敗れ、子玉は自殺する。

紀元前五七三年、魯の成公十六年、晋、楚が鄢陵で戦い、楚軍が大敗し、中軍の帥、司馬子反が自殺する。

(3) この時期の晋楚の覇権争いの中で、宋國は晋國と最も緊密で、これが、楚國としては齊、魯と通じて中原に覇を称えるのに不利と考えた、そこで、楚の莊王は口実を設けて宋國に侵攻する。

(4) 中村俊也訳『青銅時代』(『郭沫若選集』三卷)(一九八二年雄渾社)中の「興起について」(三六五頁―四二〇頁)の四二一頁―四一九頁参照

(5) 茅盾『私走過的道路』上冊(一九八一年 香港三連書店)中の「學生時代―我的小学」の本文五八頁参照

On Mr Zuo's Commentary on the Spring and Autumn Annals
Translated Using the Methodology
— A Sort of Comparison on the Cases and Expressions

Syunya NAKAMURA

「春秋左氏伝」
比事属辞

Lu Xun is the most distinguished writer in modern ages, on 1918 year, he published 《the Diary by the Mad man》 which attracted the readers in the whole worlds. Under the meaning of the same title famous Russian writer already had opened the door of a modern literature towards whole people of those day's reader in the world.

Lu Xun's melancholy exists on the present and the future of China. But the not only grasped Chinese people but also whole people in the all over the world had been influenced by Herbert Spenser, the philosopher at first had mentioned publicly the Theory of Evolution in the Society.

Lu xun's 《Kuanren riji》 depends on the famous event in the “Chunqiu Zhuan — Exchange mutually their children an eat them, and under such a unimaginable hard circumstance, both commanders in chief became to be signed for the peace treaty in order to release the people from the castle surrounded in the Risk.

This negotiation was attained by the two men, Hua Yuan and Zi Fan, who were to be seen the man of responsibilities. How were their personality taken in this text? In order to resolve this problem I carries out the methodology of a sort of comparison of common feature of the big point and examine the expressions of Spring and Autumn annals and its main commentary — 《Zuoshi Zhuan》

Hua Yuan was pursued as sensible and able talent and on the other hand Zi Fan was looked as deprived man. Hua Yuan lived a honorable carrier life, on the contrary Zi Fan lived on tragic life. Hua Yuan represents traditional small country, whereas Zi fan represents new and big country, the former was owed to be satisfied in the casual condition, while the latter was owed to be wildered in the stress of the huge handicaps.

All sentences is given as bellow ;

Preface	(1)
I prologue	(2)
II Action for realizing peace treaty	(4)
III Not easily visible strategy	(5)
IV Liberation from Frustration	(6)
V Concerning Hua Yuan's and ZiFan' Personality	(11)
Instead of Conclusion	(12)